

「出産前後における母親の心理的苦痛と、子どもの精神神経発達遅延との関係」

所属：健康科学総合教育部門

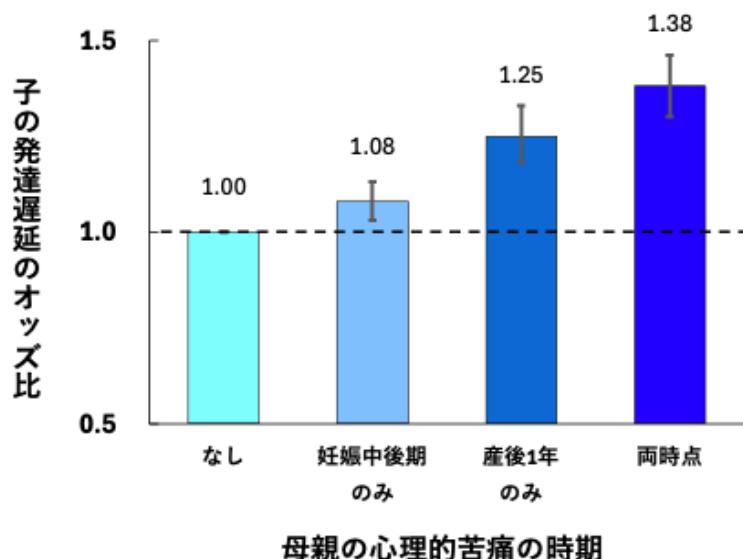
職位・氏名：教授・松村健太

I. 研究概要

青森県立保健大学の松村健太教授らの研究グループは、「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」に参加した 82,418 組の母子を対象に、出産前後の母親の心理的苦痛が子どもの精神神経発達に与える影響について検討しました。

その結果、妊娠期よりも産後の母親の心理的苦痛が、子どもの発達により深刻な影響を及ぼす可能性があることを明らかにしました（図 1）。

本研究では、これまで十分に解明されてこなかった「妊娠期と産後のいずれの時期の母親の心理的苦痛が、子どもの精神神経発達遅延により大きな影響を与えるのか」という問題を、因果推論に基づく高度な統計的モデリングを用いて定量的に示した初の試みです。



年齢、BMI、出産歴、社会経済要因、居住地域、ソーシャル・サポート状況、ストレス・イベントの有無、同居家族、うつの既往歴、葉酸摂取状況、早産や低体重出生の有無、子の性別、主要な先天奇形、栄養方法などで調整済み

**図 1. 母親の精神的苦痛「なし」を基準 (=1.00) とした時の、子の発達遅延疑いの反事実調整
オッズ比*1 (=起こりやすさ) および 95%信頼区間**

図 1 は、Matsumura K., et al. Maternal psychological distress before and after childbirth and neurodevelopmental delay in toddlers. *JAMA Network Open*, 8, e2540907, 2025 (DOI: <https://doi.org/10.1001/jamanetworkopen.2025.40907>) の表 2 を元に作図

【用語説明】

(＊1) 「反事実調整オッズ比」とは、現実とは異なる仮定に基づいて推定される指標です。たとえば、妊娠中や産後に全員の母親が心理的苦痛を抱えていた場合、あるいは全員が抱えていなかった場合、子どもの発達遅延はどれほど起こりやすくなるのか——このような仮定をもとに、高度な統計的モデリング（因果推論の手法）で推定します。具体的には、心理的苦痛がなかった場合と比べて、発達遅延のオッズ比（＝起こりやすさの比率）が何倍になるかを示します。現実とは異なる状況（反事実）を設定し、年齢、出産歴、社会経済状況といった背景の違いを考慮しながらその条件に全員を置き換えるように調整して得られる推定値であるため、「反事実調整オッズ比」と呼びられます。

II. 今後の展開

出産前後における母親の心理的苦痛と関連する子の発達遅延疑いが、3歳以降も続くのか否かという点について、引き続き、調査を続けていく予定です。

Key Words ①心理的苦痛 ②ケスラー心理的苦痛尺度（K6） ③Ages and Stages Questionnaire, Third Edition (ASQ-3 質問票) ④統計的因果推論

III. 研究室紹介

疫学・精神栄養研究室

<https://www.auhw.ac.jp/daigakuin/health/2025-0415-1612-411.html>



IV. お問い合わせ先

青森県立保健大学 キャリア開発・研究推進課 事務担当

E-Mail : kyariken@ms.auhw.ac.jp

TEL : 017-765-4085